

ビワズ通信



2008 Summer

ビワズくんのお友「アクア」ちゃん 【ビワズ通信】は、琵琶湖・淀川の上流から下流の水のかけはし情報誌です。

季刊

No. 58

夏号



アクア琵琶湖のマスコット
「ビワズくん」

<http://www.aquabiwa.jp/>



竹生島/写真提供：(社)びわこビジターズビューロー

「遠くから眺めると、その形には古墳の二本になったようなものがあり、水に浮いている所も、二つの圓にわかれている所も、前方後円墳そのままである。」

古来より信仰の対象となり、神の住む島といわれた竹生島は、神仏一体の思想で栄えた島でもあります。白洲さんは、近江に古墳時代の文化が根を下ろしていたから、神仏が一体になったのであり、竹生島の美しい姿自体が一つの歴史であると、太古から続く近江の文化を讀んで締めくくっています。

随筆家の白洲正子さん（1910～1998）は、樺山伯爵家の次女として東京水田町に生まれ、幼い頃から能を習い、14歳で女性として初めて能の舞台に立ちました。アメリカ留学を経て、のちに吉田茂首相の側近として戦後日本の復興に尽力した白洲次郎と19歳で結婚しました。古典文学に広く親しみ、世阿弥の「花伝書」を生涯の愛読書とした白洲さんは、仏像や書画骨董など日本文化全般に精通していました。

そんな白洲さんが、著書に「私は近江の得体の知れぬ魅力にとりつかれてしまった」と記しています。古いものが、古いままの形でのこるこの地に魅せられると、足繁く近江を訪れ、名著「十一面観音巡礼」や「かくれ里」を表しました。「草駈天お正」の異名をもつ白洲さんが、ヤブをかき分け、道なき道をたどって新たな発見をする道行きが、その紀行文の大きな魅力です。代表作「かくれ里」の中に、今津の北、若狭へ抜ける街道と北陸道が分かれるあたりから竹生島を見た時の印象を綴った一節があります。

「わが心の風景、琵琶湖・淀川」 近江をこよなく愛し、 竹生島に太古をみた白洲正子

知・食・見・楽
豊かな湖国をイメージした
水庭のある風景、
佐川美術館

◎コラム
琵琶湖講座リポート
◎ビワズヒックス
湖畔堤前浜の浜欠け対策
◎アクア琵琶湖 INFORMATION
アクア琵琶湖は、この夏も楽しい
イベントがいっぱい!!



随筆家 白洲正子(しらす・まさこ)

1910年、樺山伯爵の次女として生まれる。父、愛媛県実業家・貴族院議員。
父方の祖父、樺山資能は福澤諭吉の家来・政務家
1924年、女人禁制の稲葉堂の舞台に女性として初めて立ち「王様様」を演ずる
1943年、志賀直哉・柳田泉の勧めで「お伽」を刊行
1964年、「龍圖」によって「読売文学賞」を受賞
1972年、「かくれ里」によって「読売文学賞」を受賞
1991年、日本文化の継承・発展に尽くした功績により、「都文化賞」を受賞

写真提供：広川泰士

表紙イラスト：海津大崎付近からみた竹生島